

2020 年度 明治大学
【情報コミュニケーション学部】

解答時間 60分
配点 100点

め





国 語 問 題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は二六ページまである。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に楷書で記述すること。(解答用紙は表裏両面にある)
5. 解答は、必ずHBの黒鉛筆を使用すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. 解答用紙は、持ち帰らないこと。
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. この試験時間は、六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	  

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

子供の頃、かなり広い家に住んでいた私は、使われていないいくつかの部屋を日常の空間のまわりにぼんやりと意識していた。それらの部屋には、日頃使っている部屋とは別の時間が住みついているような気がして、あまり入りたくなかった。たまにそれらの部屋に身を入れてみると、部屋は最後に使ったときそのまま残っている。時間はそこで凍りついていたのである。物のあいだにはまるで身ぶりがのこっているように思えた。家全体のなかに、数多くの記憶がただよっているような印象を私は抱いていた。古いタンスの抽出しや引違い棚をあけたときにも、一種コげたような匂いととも、古い書付けや品物が見つかったこともよく憶えている。抽出しにも引違い棚にもいつから入っていたのかわからぬようなものがあった。自分のへその緒を見つけたこともある。それらは自分の知らぬ記憶にめぐりあったような経験だった。家のなかには、人びとがもう忘れてしまったたり、関係のある人びとが死んでしまったりしたもの、いっぱい詰まっていたのである。

それだけではない。子供の頃には、棚の上の置物も、書架の本も、ある種の知解できない **A** だった。かたちや色はよく知っている。だが、それがなんのためにそこにあるのか、そもそもなんというものかも知らなかった。たとえば銀色をして、滑走するカモメのようなかたちをしたものというような映像だけがあった。私は、それらをやはり、私の知らぬ記憶を、未来でも見るような印象でながめていた。家のなかには、 **B** のわからなくなったものも多かった。それは、建物の部分でもとは機能があったはずなのに、いつのまにかそれがなくなりついでその **B** も忘れられたがまだ装飾につかわれているものと、同じような働きをしているのかもしれない。これらは、私は知らなくても、いろいろ調べていけば意味がわかるかもしれない。建築史家はしばしばそういう方法で、現在の役割からは説明のつかない物の起源を解読していくものだ。名づけようもなく、直接読み解くこともできず、またそこになぜあるかもわからぬ来歴を家が記憶しているといつてもよかる

う。

このような意味で家はまさに多様な時間の結果である。家そのものが記憶である。それは私だけでなく、私の先祖たちの痕跡であり、さらに、家族をこえて家をつぎつぎに進化させてきた人類の時間の痕跡が重なっている。厳密に言えば、さきに区別したように家の記憶のなかにも人類学的時間①に属する歴史と家族に属する歴史とを区別しなければならぬだろう。いずれにしる記憶ということばを用いるのは、現在を過去との関係で問いなおすことを意味している。そしてこの関係は家を多重に織られたテキストに変えていくのである。

たしかにフランシス・エイツの『記憶術』らしい、建築や都市が古代や中世において記憶をたすける手段として利用されたことはよく知られるようになった。覚えるべき事柄を、いくつかの建築やその部分や前庭などにあてがい、建築の識別しやすさや想起しやすさによって忘れさることを防ごうとするわけだが、この場合、明らかに日常使用する建築の構成部分は記憶すべき弁論の内容よりもはるかに身体に刻まれ、覚えやすかつたので記憶術の道具になったのであり、記憶される内容と場所との関係には深い意味はなかった。しかし、この結びつきから建築がやがて「記憶」の隠喩として用いられるきっかけが生じたようである。アウグスチヌスにいたってはじめてかたちのない記憶の群れがひしめくありさまを、夥しい部屋をもつ建築という隠喩によって記述しようという試みがなされた。エレン・イーヴ・フランクがアウグスチヌスの比喩を簡潔にまとめた文章を借りよう。

アウグスチヌスは(記憶術を述べるときに)建築的な道具を隠喩に翻訳した。記憶は無数のイメージのための大きな倉庫であり、また記録された心の活動性のパーマネント・コレクションを保有する大きな宝物殿である。アウグスチヌスが語るるところによれば、頭脳的な出来事の倉庫は、新しく獲得された知的な収集品の記録を保管する部屋を容易につけ加える

ことができる。この内密のひそかな場所には、広大な貯蔵庫と広大な修道院があり、それらは驚くべきコンパクトメントのシステムと無数の地下室や空洞が含まれている。

だがこのことをあまり強調するのは疑問である。すでに述べたように未開の社会では、「家」や集落はたんに住む道具ではなく、社会組織や慣習を空間に転換した記憶装置だったのである。いずれにしろ、記憶と空間のあいだにはまだ確実に論じえない深い関係が存在しているようである。私たちがなんとも思わないで使っている家が、私たちを知らず知らず集団的記憶に近づけると述べたのもそのことをさしていた。私たちは記憶＝歴史から無縁ではありえない。

長い世代にわたって生きられた家ほど、家族の歴史についての記憶が充満している。西洋の十七、八世紀の貴族の館やブルジョアジーのサロンには、夥しい数の肖像画がかかっていた。これらの肖像画はたいいその館の所有者と家族、及びかれらの父祖のものである。墓のなかではすっかり朽ち果てていであろう人びとをうつしだす「時間の鏡」であり、館の住み手は、これらの肖像つまり自らの家族の歴史によって、自分を認識し他人に対する存在(身分)として自分を把握しえたのである。かつては、このような過去把握が、住み手にとって住むこと、生存することの意味の発見にほかならなかつた。だからかつての家は、記憶つまり時間の象徴にみちていたのである。鏡はほとんど肖像画と同じような意味を空間化する仕掛けであり、時計も実際の時を刻む以上に時間の象徴さらには家父長制度の象徴としてあらわれた。それはブルジョワの家の中心にあつたあの背の高い時計が、グラント・ファーザー・クロックと擬人化してよばれていたことを思い出せば充分である。

このような時間の象徴はさわめて装飾的であつたから、近代デザインとともに完全に追放された。近代デザインは家族の歴史を追放したというより、むしろそのあらわし方、記憶の形態を払拭したのである。しかしもう一方で近代デザインは、人類学的時間の多元性を、過去を切りはなすことで一元化しようとした。現在が現在であるためには、過去の様式から解放されね

ばならない。既存の文脈を尊重し、その上に接木のように現在を構成するやり方が、実際には全体の新しい再構造化であることを認めずゼロから始めることを主張した。この両方によって家が記憶を保持し、その二重の時間性に人びとをあずからせることによって、住むことの意味をあたえることはなくなった。そのようにデザインされた住宅を、私はすべてモダニズムと考える。

家族の歴史については肖像画の行方が暗示的である。それはやがて写真にかわり、この写真はアルバムなりスライドケースなりに納まってしまいこまれるようになった。かつては家に結びついた記憶の意味が、そんなかたちに変形したときにも保たれるというのは信じられないかもしれない。しかし驚くべきことに、ある年の台風でマイホームを失った人びとのうち、アルバムを流出したことを残念に思った人がもつとも多かつたという調査結果がある。それは、家と記憶のキレツを別の面から見なおす必要を感じさせる。このエピソードでは、アルバムは明らかに生きることの意味の次元を構成している。たしかに、もはや建物は記憶に充満しているものでもなければ、住むことの意味において人びとに働きかけるものでもなくなったが、人間は個人史によって自分を確かめるといふ心理を欠いては生きられないことを示しているようである。人間は家を失いつつあるときに、かつて家のしまいこんだ生活の記憶をもつと端的な記録に外化して保ちつづけているように見える。

(多木浩二『生きられた家』による)

問一 傍線 a、b のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 本文には次の一文が抜けている。この文を挿入すべき箇所の直前の十字を抜き出しなさい。ただし、句読点も字数に含めるものとする。

これは比喩的にいえば家の無意識を、あらわれている物を鍵にして探っていくようなことではないか。

問三 空欄Aに入る語を次の中から一つ選びなさい。

- 1 メタファー
- 2 イメージ
- 3 ロジック
- 4 オブジェ
- 5 システム

問四 空欄Bに入る語を本文中から探して解答欄に書きなさい。

問五 傍線①「人類学的時間に属する歴史」を言い換えた五字の言葉を本文中から探して解答欄に書きなさい。

問六 傍線②「このこと」は何を指しているか。本文中の三十四字の言葉で答えなさい。解答はその言葉のはじめとおわりの五字を解答欄に書きなさい。ただし、句読点は字数に含めないものとする。

問七 傍線③「鏡はほとんど肖像画と同じような意味を空間化する仕掛けであり、時計も実際の時を刻む以上に時間の象徴さ
らには家父長制度の象徴としてあらわれた」とあるが、その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 鏡と時計は、現在自分が存在するのは異なる空間や時代に自分を結びつける紐帯である。
- 2 鏡と時計は、それを見る者に、個人を越えて特定の家系に属することを確認させる装置である。
- 3 鏡と時計は、祖先の時代から生き続ける精霊が後の世代を静かに見守るための媒体である。
- 4 鏡と時計は、過去に生きた祖霊たちを今に生きる者と同居させ、現在を神聖化する祭具である。
- 5 鏡と時計は、個人や伝統を呑み込んだうえで、それを対象として永遠化していく道具である。

問八 傍線④「モダニズム」を筆者はどのようなものにとらえているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 最先端の時流からも旧来の伝統からも、それぞれよいところを等しく抽出し融合すること。
- 2 過去の記憶を保持しながら、それを最新の様式に組み込んで近代を構築していくこと。
- 3 古い記憶や伝統をいさぎよく切り捨て、まっさらの状態から新たな創造活動を行うこと。
- 4 記憶や伝統を大切にし、古いものの中にこそ新しいものを見出そうとする態度のこと。
- 5 装飾性をはぎ取り、時代の最先端に立って、近代的なデザインを追求していくこと。

問九 傍線⑤「端的な記録」とは具体的に何をさすか。本文中から四字で抜き出し、解答欄に書きなさい。

問十 本文全体の論旨から見て、筆者の考える「記憶」とはどのようなものか。もつとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 記憶とは、個人を伝統に縛りつける因習であり、そこから脱却するためには大きな努力が必要とされるものだ。
- 2 記憶とは、幼年時代に形成され、その後の個人の行動や思想を一生涯にわたって呪縛するものだ。
- 3 記憶とは、必ずしも意識されるものではなく、無意識のうちに個人の行動をコントロールするものだ。
- 4 記憶とは、巨大な貯蔵庫のようなもので、必要に応じて取り出せば行動の指針として役に立つものだ。
- 5 記憶とは、個人の思い出を越えて、時間的にも空間的にもその一族や人類史にまで拡がっているものだ。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

早稲田へ移ってから、猫がだんだん瘠せて来た。いつこうに小供と遊ぶ気色がない。日が当ると縁側に寝ている。前足を揃えた上に、四角な顎を載せて、じっと庭の植込を眺めたまま、いつまでも動く様子が見えない。小供が幾らその傍で騒いでも、知らぬ顔をしている。小供の方でも、初めから相手にしなくなった。この猫はとても遊び仲間にできないといわんばかりに、旧友を他人扱いにしている。小供のみではない、下女はただ三度の食を、台所の隅に置いてやるだけでそのほかには、ほとんど構いつけなかった。しかもその食はたいがい近所にいる大きな三毛猫が来て食ってしまった。猫は別に怒る様子もなかった。喧嘩をするところを見た試もない。ただ、じっとして寝ていた。しかしその寝方にどことなく余裕がない。伸んびり楽々と身を横に、日光を領しているのと違って、動くべきせきがないために——これでは、まだ形容し足りない。①懶さの度をおある所まで通り越して、動かなければ淋しいが、動くとなお淋しいので、我慢して、じっと辛抱しているように見えた。その眼つきは、いつでも庭の植込を見ているが、彼れはおそらく木の葉も、幹の形も意識していなかったのだろう。青味がかった黄色い瞳子を、ぼんやり一と所に落ちつけているのみである。②彼れが家の小供から存在を認められぬように、自分でも、世の中の存在を判然と認めていかなかったらしい。

それでも時々は用があると見えて、外へ出て行く事がある。するといつでも近所の三毛猫から追かけられる。そうして、怖いものだから、縁側を飛び上がって、立て切つてある障子を突き破つて、囲炉裏の傍まで逃げ込んで来る。家のものが、彼れの存在に気がつくのはこの時だけである。彼れもこの時に限つて、自分が生きている事実を、満足に自覚するのだろう。

③これが度重なるにつれて、猫の長い尻尾の毛がだんだん抜けて来た。始めはところどころがぼくぼく穴のように落ち込んで見えたが、後には赤肌あかだに脱げ広がって、見るも気の毒なほどにだらりと垂れていた。彼れは万事に疲れ果てた、体軀からだを押し曲

げて、頻りに痛い局部を舐め出した。

おい猫がどうかしたようだなというのと、そうですね、やっぱり年を取ったせいでしようと、妻は至極 A である。自分もそのままにして放っておいた。すると、暫くしてから、今度は三度のものを時々吐くようになった。咽喉の所に大きな波をうたして、嘔とも、しゃくりともつかない苦しそうな音をさせる。苦しうだけれども、やむをえないから、気がつくときと表へ追い出す。でなければ畳の上でも、布団の上でも容赦なく汚す。来客の用意に拵えた八反の座布団は、おおかた彼れのために汚されてしまった。

「どうもしょうがないな。腸胃が悪いんだらう、宝丹でも水に溶いて飲ましてやれ」

妻は何ともいわなかった。二三日してから、宝丹を飲ましたかと聞いたら、飲ましても駄目です、口を開きませんという答をした後で、魚の骨を食べさせると吐くんですと説明するから、じゃ食わせんが好いじゃないかと、少し嶮どんに叱りながら書見をしていた。

猫は吐気がなくなりさえすれば、依然として、おとなしく寝ている。この頃では、じつと身を竦めるようにして、自分の身を支える縁側だけが便であるという風に、いかにも切りつめた蹲踞まり方をする。眼つきも少し変わって来た。始めは近い視線に、遠くのもの映る如く、 B たるうちに、どこか落ちつきがあったが、それがしだいに怪しく動いて来た。けれども眼の色はだんだん沈んで行く。日が落ちて微かな稲妻があらわれるような気がした。けれども放っておいた。妻も気にもかけなかったらしい。小供は無論猫のいる事さえ忘れている。

ある晩、彼は小供の寝る夜具の裾に腹這になつていたが、やがて、自分の捕った魚を取り上げられる時に出すような唸声を挙げた。この時変だなど気がついたのは自分だけである。小供はよく寝ている。妻は針仕事に余念がなかった。暫くすると猫がまた唸った。妻はようやく針の手をやめた。自分は、どうしたんだ、夜中に小供の頭でも噛られちゃ大変だといった。まさ

かと妻はまた襦袢の袖を縫い出した。猫は折々唸っていた。

明るる日は囲炉裏の縁に乗ったなり、一日唸っていた。茶を注いだり、葉罐を取ったりするのが気味が悪いようであった。が、夜になると猫の事は自分も妻もまるで忘れてしまった。猫の死んだのは実にその晩である。朝になって、下女が裏の物置に薪を出しに行った時は、もう硬くなって、古い籠の上に倒れていた。

妻はわざわざその死態を見に行った。それから今までの冷淡に引き更えて急に騒ぎ出した。出入の車夫を頼んで、四角な墓標を買って来て、何か書いてやって下さいという。自分は表に猫の墓と書いて、裏に C と認めた。車夫はこのまま、埋めてもいいんですかと聞いている。まさか火葬にもできないじゃないかと下女が冷かした。

小供も急に猫を可愛がり出した。墓標の左右に硝子の罎を二つ活けて、萩の花をたくさん挿した。茶碗に水を汲んで、墓の前に置いた。花も水も毎日取り替えられた。三日目の夕方に四つになる女の子が——自分はこの時書齋の窓から見ている。

④ たった一人墓の前へ来て、暫く白木の棒を見ていたが、やがて手に持った、おもちゃの杓子をおろして、猫に供えた茶碗の水をしゃくって飲んだ。それも一度ではない。萩の花の落ちこぼれた水の瀝りは、静かな夕暮の中に、幾度か愛子の小さい咽喉を潤おした。

猫の命日には、妻がきつと一切れの鮭と、鰹節をかけた一杯の飯を墓の前に供える。今でも忘れた事がない。ただこの頃では、庭まで持って出ずに、たいていは茶の間の箆筒の上へ載せておくようである。

(夏目漱石『永日小品』による)

(注) *小供……………漱石の子供たち。複数いる。

*下女……………住み込みの家事手伝い女性。

*せき……………元氣。

*八反……………八端織り。縦、横に褐色、黄色の縞模様のある絹織物。

*宝丹……………赤褐色の気付け薬。頭痛、はきけ、めまいなどに用いる。

*嶮どん……………無愛想なようす。つつけんどん。

*車夫……………人力車の引き手。

*愛子……………漱石の四女の名前。

問一 傍線 a、b の漢字の読みかたをひらがなで書きなさい。

問二 傍線①「ものう懶さの度

をある所まで通り越して、動かなければ淋しいが、動くとなお淋しいので、我慢して、じつと辛抱している」とあるが、この描写は猫がおかれているどのような状態を表現しようとしているか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から選びなさい。

- 1 猫らしく活動したいのだが、そのことで逆に自らの無おごま様さを思い知らされるので仕方なく思い留まっているようす。
- 2 年を取り過ぎて、何をするのも面倒くさくなってしまい、飼い主が構ってくれるまで待つほかない不満足なようす。
- 3 気力は漲みなっているのに、年を取ってその気力に体力が追いつかない自分の状態にいらだっているようす。
- 4 夏目家で世話になった想い出に浸りながら、恩に報いることができないう我が身の不甲斐なさを嘆いているようす。
- 5 死期が近いことを察知し、自由が利かなくなつた体を持て余しながら覚悟して死を待っているようす。

問三 傍線②「彼れが家の小供から存在を認められぬように、自分でも、世の中の存在を判然はつきりと認めていなかったらしい」とあるが、この文の説明としてもっとも適切なものを次の中から選びなさい。

- 1 仲が良かった夏目家の子供たちの判別もできないほどに猫の知覚能力が衰えたことをあらわしている。
- 2 遊び仲間だった子供たちから構われなくなったことで世間に対する猫の関心が失せたことをあらわしている。
- 3 妻や下女のみならず子供たちからも相手にされなくなり夏目家と猫との絆が断たれつつあることをあらわしている。
- 4 猫に死期が近づいて、猫とこの世との関わりが次第に希薄になっているようすをあらわしている。
- 5 死を間近にして猫本来の野生を取り戻し、人間世界の無意味さを悟ったことをあらわしている。

問四 空欄Aに入る語を本文中から見つけて解答欄に記しなさい。

問五 傍線③「これ」は何を指すか。本文中から七字で抜き出しなさい。

問六 空欄Bに入るもっとも適切な語を次の中から選びなさい。

- | | | |
|------|------|------|
| 1 呆然 | 2 忽然 | 3 泰然 |
| 4 決然 | 5 悄然 | |

問七 空欄Cにはある俳句が入る。その俳句を次の中から選びなさい。

- 1 永き日や巳みの刻ときよりの眠り猫
- 2 恋猫こねこの眼まなこばかりに瘦せにけり
- 3 骸骨がいこつやこれも美人びじんのなれの果は
- 4 この下に稻妻いなづま起る宵あらん
- 5 有る程あるほどの菊きく投げ入れよ棺かんの中

問八 傍線④「たった一人墓の前へ来て、暫く白木の棒を見ていたが、やがて手に持った、おもちゃの杓子をおろして、猫に供えた茶碗の水をしゃくって飲んだ。それも一度ではない」とあるが、この箇所に関する次の二つの問ア・イに答えなさい。

(ア) 筆者は女の子の所作にどのような意味を読み取ろうとしているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選びなさい。

- 1 猫の死から数日経って初めてかわいがっていた猫の死が子供に重みをもって受けとめられてきたこと。
- 2 猫の死を悼む行為が、次第に形骸化し、墓参のまねごとという遊戯に変質していったこと。
- 3 死期が迫った猫に子供たちは冷たく振る舞っていたが、実は心の中で終始猫を思いやっていたこと。
- 4 お供えの茶碗の水を飲むという行為によって猫と女の子の友情が永遠に続いてゆくだろうこと。
- 5 大人のやり方とは違っていても、子供はまた子供なりの仕方では飼った猫の死を悼んでいること。

(イ) 漱石は、妻の所作にも女の子の場合と似た意味を読み取っている。妻のその所作を示した一文を本文から探し、最初の五字を解答欄に記しなさい。

問九 本文は夏目漱石の随筆であるが、次のうち漱石の作品を選びなさい。

- 1 陰翳礼讃
- 2 普請中
- 3 硝子戸の中
- 4 美しい日本の私
- 5 日本文化私観

次の文章ⅠとⅡを読んで、後の問に答えなさい。なお、文章Ⅱは、文章Ⅰの内容を基に創作された小説の一部である。

I

今は昔、京に有りける男の、妻は丹波国の者にて有りければ、男、その妻を具して、丹波国に行きけるに、妻をば馬に乗せて、夫は竹えびらの箭十ばかり差したるを掻負ひて、弓打持ちて、後に立て行きける程に、大江山の辺に、^①若き男の太刀ばかりを帯びたるがいと強氣なる、行つれぬ。

然れば相具して行くに、互ひに物語などして、「主は何こへぞ」など語らひ行く程に、此の今行つれたる、太刀帯びたる男の云はく、「己れが此の帯びたる太刀は陸奥国より伝へ得たる高名の太刀なり。此れ見給へ」とて抜きて見すれば、実にめでたき太刀にて有り。本の男^ア此れを見て、欲しき事限無し。今の男、其の氣色を見て、「此の太刀要に御せば、其この持ち給へる弓に替へられよ」と云ひければ、此の弓持ちたる男、^②持ちたる弓はさまでの物にもあらず、彼の太刀は実によき太刀にて有りければ、太刀の欲しかりけるに合はせて、「極めたる所得してむず」と思ひて、左右無く差し替へてけり。

さて行く程に、此の今の男の云はく、「己れが弓の限り持ちたるに、人目もをかし。山の間其の箭二筋借されよ。其の御為も此く御共に行けば、同じ事にはあらずや」と。本の男^イ此れを聞くに、「現に」と思ふに合はせて、吉き太刀をつたなき弓に替へつるが喜しさに、云ふままに箭二筋を抜きて取らせつ。然れば、弓打持ちて箭二筋を手箭に持ちて、後に立ちて行く。本の男は竹えびらのかざりを掻負ひて太刀引帯びてぞ行き

A

しかる間、昼の養せむとて藪の中に入るを、今の男、「人近には見苦し。今少し入りてこそ」と云ひければ深く入りにけり。さて女を馬より抱き下しなどする程に、此の弓持の男、俄かに弓に箭番ひて、本の男に差宛てて強く引きて、「己れ動かば射殺してむ」と云へば、本の男、更に此くは思ひ懸けざりつる程に此くすれば、物も思えで只向ひ居たり。其の時に、「山の奥へ

罷入れ入れ」とおどせば、命の惜しきままに、妻をも具して七八町ばかり山の奥へ入りぬ。さて、「太刀・刀投げよ」と制し命ずれば、皆投げて居るを、寄りて取りて打ち伏せて、馬の指繩を以て木に強く縛り付けつ。

(中略)

其の後、女寄りて男をば解き免してければ、男、我れにもあらぬ顔つきして有りければ、女、「汝が心云ふ甲斐無し。今日より後も此の心にては更にはかばかりしき事有らじ」と云ひければ、夫、更に云ふ事無くして、其こよりの具して丹波に行きける。

今の男の心いと恥かし。男、女の着物を奪ひ取らざりける。本の男の心いとかなし。山中にて一目も知らぬ男に弓箭を取らせけむ事、実に愚かなり。其の男遂に聞えて止みにけりとなむ、語り伝え

B とや。

〔今昔物語集〕による

II

④ 検非違使に問はれたる旅法師の物語

⑤ あの死骸の男には、確かに昨日遇っております。昨日の、——さあ、午頃でございますでしょう。場所は関山から山科へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は牟子を垂れておりましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのは唯萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確か法師髪ほうしがいの馬のようでございます。文でございますか？ 文は四寸もございましたか？——何しろ沙門の事でございますから、その辺ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯びておれば、弓矢も携へておりました。殊に黒い塗り籠へ、二十あまり征矢をさしたのは、唯今でもはつきり覚えております。

あの男がかようになるうとは、夢にも思はずにりましたが、真に人間の命などは、如露亦如電に違いございません。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。

多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。では、何処へ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されませぬ。その上わたしもこうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

(中略)

何、男を殺すなどは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うとなれば、必ず、男は殺されるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使はない、唯権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしなまの言葉だけでも殺すでしょう。成程血は流れない、男は立派に生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりませぬ。(皮肉なる微笑)

(芥川龍之介『藪の中』による)

(注) 箭…弓につがえて射る物。矢。

養ひ…食事をする事。

指繩…馬の口につけて引く繩。

牟子…女性の顔を隠す薄い布。

萩重ね…紫色と薄紫色の二色を合わせて萩の花の重なりを表した色目。

月毛…馬の毛の色でクリーム色から淡い黄色の体の表面を被う毛。

法師髪…短く刈り揃えた馬のたてがみ。

沙門…仏教の修行僧。

征矢…鋭い矢じりをつけた戦闘に用いる矢。

如露亦如電…『金剛般若経』に拠る言葉で、この世の全てのものは露や電光のように儚いものであるという意味。

問一 傍線ア～カについて、傍線①「男」と同じ人物の組み合わせとして正しいものを次の中から一つ選びなさい。

1 ア・ウ

2 イ・オ

3 ウ・カ

4 エ・カ

5 イ・エ

問一 傍線②「持ちたる弓はさまざまの物にもあらず」の説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 男が持っている弓は、それほど遠くまで矢を飛ばせるものではない。
- 2 自分が持っている弓は、太刀と勝負できるほど丈夫なものではない。
- 3 男が持っている弓は、自分が持っている弓よりも古いものではない。
- 4 自分が持っている弓は、それほどの価値のあるものではない。
- 5 自分が持っている弓は、男が持っている太刀ほどに長いものではない。

問三 傍線③「汝が心云ふ甲斐無し。今日より後も此の心にては更にはかばかしき事有らじ」の説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 あなたが気持ちを变えても今更無駄なことです。今日からこの先もそのような移り気では先が思いやられます。
- 2 あなたの気持ちはもちろんわかっています。今後その気持ちでいる限り状況が好転することはないでしょう。
- 3 あなたの心は何を言おうと変わらないことでしょう。これからもその気持ちが少しでも変わることはないはずで。
- 4 あなたには私の心の内を明かしても無駄なことでしょう。この先もずっと私のこの気持ちは変わりません。
- 5 あなたの心持ちは何とふがいのないことでしょうか。これから先もこのような心がけでは到底頼りになりません。

問四 空欄A・Bに入る言葉の組み合わせとしてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- | | | | | |
|---|---|----|---|----|
| 1 | A | ける | B | たる |
| 2 | A | けり | B | たり |
| 3 | A | けれ | B | たる |
| 4 | A | ける | B | たり |
| 5 | A | けり | B | たれ |

問五 傍線④「検非違使」について次の問に答えなさい。

(ア) 「検非違使」の読み仮名を空欄に書きなさい。

(イ) 文章Ⅱにおける「検非違使」の物語内での役割を説明したものととして誤っているものを次の中から一つ選びなさい。

1 文章Ⅰでは物語内容が登場人物の心情を中心に語られているが、文章Ⅱでは検非違使が登場することで時代背景や状況設定が詳細に表され、出来事のあらましが明確になっている。

2 文章Ⅰでは物語内容が作品世界外の語り手の視点から俯瞰的に語られているが、文章Ⅱではそれぞれの登場人物が検非違使に証言する形をとることで出来事の顛末が相対的に描出されている。

3 文章Ⅰでは物語内容が出来事の推移に従い時系列的に語られているが、文章Ⅱでは検非違使が後日談として過去を再構成することで、その出来事が再現されている。

4 文章Ⅰでは物語内容が他人からの伝聞として語られているが、文章Ⅱでは検非違使が関係者の見解を公平に聞き取ることにより、出来事の多角的な見方が提示されている。

5 文章Ⅰでは物語内容が第三者の語り部の推測として語られているが、文章Ⅱでは検非違使が聴取した登場人物の証言が併置されることにより、真実確定の難しさが提起されている。

問六 傍線⑤「あの死骸の男」とはどの登場人物に該当するか。次の中から適切なものを一つ選びなさい。

- 1 丹波国の者
- 2 京に有りける男
- 3 一目も知らぬ男
- 4 弓持の男
- 5 太刀帯びたる男

問七 文章ⅠとⅡにおける物語の語り方の違いについての説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1 文章Ⅰでは物語世界外の語り手が伝え聞いた出来事に関する評価を下しているのに対して、文章Ⅱでは物語世界内の登場人物がそれぞれの見聞や内面を吐露している。

2 文章Ⅰでは物語世界外の語り手が客観的な真実を語っているのに対して、文章Ⅱでは物語世界内の登場人物が空想的な見方を提示している。

3 文章Ⅰでは語り手が実際に体験した出来事を語っているのに対して、文章Ⅱでは登場人物が裁判に出廷し、伝え聞いた話を報告している。

4 文章Ⅰでは語り手が登場人物の近親者として心境を告白しているのに対して、文章Ⅱでは事件の傍観者が状況証拠に基づき事件の真相を推定している。

5 文章Ⅰでは語り手が古代の習わしや迷信を信じて自らの考えを述べているのに対して、文章Ⅱでは物語世界外の人物が史実を科学的に検証している。

問八 以下の画像と文章は、文章Ⅱを踏まえて制作された映画の一続きの場面とそれに対応するシナリオを物語の展開の順に並べたものである。同じ題材を用いた映画と文章とを比較した次の説明のうち、もつとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。ただし、シナリオ中の太字は「ト書き」であり、「」内は役者の台詞せりふを示している。「ト書き」とは、役者の動作など、演出上の指示書きである。

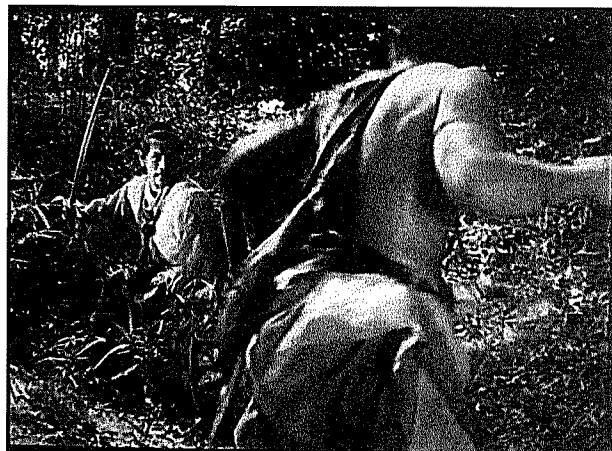
1 映画では「俺と二十合を斬り結んだものは、天下にあの男一人だけだ……ハハハハ」という台詞から明らかのように登場人物のメッセージが会話の形で直接表されることで、文章Ⅰ・Ⅱではきめ細やかに描かれる登場人物の内面が削ぎ落とされて、類型的な人物像が示されている。

2 映画では「武弘、血相をかえて立上がると、太刀を抜き、無言で多襄丸に斬ってかかる。格闘、二十数合——多襄丸、遂に武弘を倒す」などのト書きにおいて原作の内容が大幅に簡素化され、文章Ⅰ・Ⅱに盛り込まれていた過剰な情報が省略されている。

3 映画では「これを忘れないでくれ。俺は今でもこの事だけは感心だと思っている」と述べる多襄丸の生き生きとした表情や、格闘場面での躍動感ある身振りなどの非言語表現を通して、文章Ⅰ・Ⅱでは表現することが難しい人物の内面が鮮やかに描写されている。

4 映画では検非違使庁の庭や林の中の舞台、登場人物である多襄丸の衣装や装具などの細部に入念な時代考証がなされ、文章Ⅰ・Ⅱでは詳細に描かれることのなかった生活空間が眼前に現れることで、現代とは異なる物語世界の虚構性が誇張されている。

5 映画では「俺は、男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくなかったのだ」という登場人物の台詞からわかるように、殺人事件の全貌を丹念に描くことで、文章Ⅰではなく、文章Ⅱの作品の方が史実に即した内容であることを立証しようとしている。



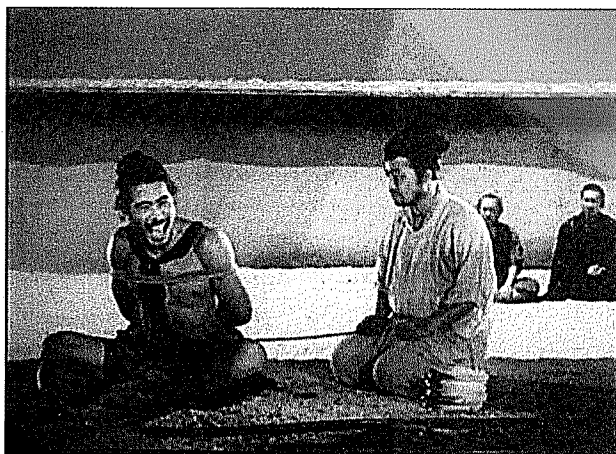
場面三〇 林の中

武弘、血相をかえて立上がると、太刀を抜き、無言で多襄丸に斬ってかかる。

格闘、二十数合―



多襄丸、遂に武弘を倒す。



場面三一 檢非違使庁の庭

多襄丸「俺は、男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくなかったのだ。そして、あの男は立派に闘った……俺の太刀は二十三合目に……これを忘れないでくれ。俺は今でもこの事だけは感心だと思っている。俺と二十合を斬り結んだものは、天下にあの男一人だけだ……ハハハハ……」

なに？女はどうした？
……知らん、俺は男が倒れると同時に、女の方を振り返った。女はどこにも居ない。大方、俺たちが太刀打ちをはじめると、その恐ろしさに逃げ出したのだろう。」

(注) 合…試合や合戦の回数

のこと

(黒澤明『羅生門』による)

